

湛甘泉の「大科訓規」について

志 賀 一 朗

「大科訓規」とは、湛甘泉が大科書院において、門弟を教育した教育方針である。

甘泉は五十歳の年、病氣静養のため、西樵（廣東省南海縣）に歸つた。ここには煙霞の洞があつて、四方の英才が集まつた。この諸生は、全員で石を集めて土臺を作り、その土臺に木を集めて、住居や堂や館を作つて、講學の場とした。この進修の地が、大科峯に近かつたので、大科書院と名づけた。

五十以憂病歸西樵。樵中有煙霞之洞。四方英才集焉。乃胥與集石爲臺、因臺集木、爲居爲堂館、爲講學。進修之地、以邇大科峯。因曰大科書院。（甘泉文集卷六「大科訓規」イ）

ここで甘泉は、諸生に教言を求められたが、何年も、「われ言あらんや。」といつて、何も教えなかつた。それは、いたずらにいうことを欲しなかつたからである。

こうしていること五年、ついに正徳十五年（一五二〇）、甘泉五十五歳の季夏望月、「われいづくんぞ得てこれを默せんや。」といつて、簡條書きにしたのが、「大科訓規」である。

諸生咸請有教言。甘泉子勿有言者。逾歲、諸生復請有教言。甘泉子勿有言者。逾時、甘泉子曰、吾有言乎哉。諸生其以言焉。吾無言焉可也。吾不徒言乎哉。諸生其不言焉。吾雖欲無言焉、吾惡得而默諸。迺爲條之。如左。

（同ウ）

この訓規には、序、絞規、訓規圖、大科書堂訓などがあつた。既述したところは、「序」の前半であるが、後半には、「大科訓規」は、どういう気持ちで作つたものであるかを述べている。

凡以發諸心性也。凡以歸諸心性也。凡以無所外於心性也。吾其不徒言也。已諸生、以吾不徒言之實、而求得吾之所以言焉、由得吾之所以言而契、夫吾之無所容於言

焉。其幾矣。其幾矣。(同エ)

私がいたずらにいわないのは、私のいうことは、すべて心性に發し、心性に歸るからである。既に諸生が、私がいらずらにいわない實事をもつて、私がなせいかのか、そのわけを求め、これを心に銘記したら、それこそ私は、もう何もいうべきことはない。それを切望する。

この言葉は、甘泉の門弟への教育の厳しさを思わせる。

二

さて、「大科訓規」を作つたが、これを習うものが、漫りにそのすじ道を知らないことを、あれこれ考え、そこで、訓規圖を作り、また紋規を作つた。

予既爲大科訓規、又慮夫習之者、漫不知其統。是故、括而圖之、作序規。(同「紋規」一ア)

註 序規は紋規の誤り。

この「紋規」は、まず何のために作つたものかを述べている。「紋規」を作つたのは、心を學ぶことだけにある。何事も心ではないものはない。だから、心が心として、正當な働きを得たら、敬であり、敬は義となる。反對に正當な働きを失えば、肆であり、利となる。利と義とは、はつきり分かれている。

夫紋規何爲者也。夫學心而已焉者也。何莫非心也。心得

其職、則敬。敬爲義。心失其職、則肆。肆爲利。利義之判也、間焉者也。(同「紋規」イ)

次に、心が正當な働きを得た場合は、敬義となり、道に志し、二十二項目に互る徳目を擧げている。

- 1 天理を體認する。
- 2 實樂をする。
- 3 道を人倫の間に求めることをする。
- 4 篤實となる。
- 5 言動が中から出る。
- 6 怨尤遷怒がない。
- 7 父兄に仕えて誠切である。
- 8 自分から師を得ることをする。
- 9 傳習をする。
- 10 長者に遇つて謙讓をする。
- 11 同門に處して久敬となる。
- 12 約信をする。
- 13 成心を去ることをする。
- 14 二業合併である。
- 15 内外混合である。
- 16 讀書調心合一である。
- 17 作字は敬である。

- 18 考業に心を用いることが精である。
 - 19 書を読み山水を觀るのに、自分を失わない。
 - 20 六經に博く、知見を開くことをする。
 - 21 作文は得る所を發揮する。
 - 22 家僕を教束して、その仲間に満足と與える。
義爲志道。爲體認天理。爲實樂也。實爲求道於人倫之間。
爲篤實。爲言動由中出。爲不怨尤遷怒。爲事父兄也誠切。
爲自得師。爲傳習。爲週長者謙讓。爲處同門久敬。爲約
信。爲去成心。爲二業合併。爲内外混合。爲讀書調心合
一。爲作字也敬。爲考業用心也精。爲讀書觀山水、不失
己。爲博六經、以開知見。爲作文也發揮所得。爲教束家
僕、充其類焉。及其成也、爲君子。(同「敍規」ウ)
- 以上の二十二項目が達成されると、君子となる。
- これに對して、心が正當な働きを得ない場合は、肆利と
なり、志がなく、二十二項目の不徳目となり、小人となる。
- 1 肆欲となる。
 - 2 虛樂をする。
 - 3 倫を外にして道を求める。
 - 4 文藝を先にする。
 - 5 巧令で偽を滋くする。
 - 6 暴怒となる。

- 7 父兄に仕えて不誠切となる。
- 8 師を求めることをしない。
- 9 傳えて習はない。
- 10 長に遇つて抗倨をする。
- 11 同門猜嫌をする。
- 12 期約不信をする。
- 13 成心を師とする。
- 14 いたずらに學業を事とし、祿を干めることをする。
- 15 支離となる。
- 16 讀書主敬兩途となる。
- 17 作文に好きを欲することをする。
- 18 考業に心を用いることが粗となる。
- 19 書を読み山水を觀るのに枯亡となる。
- 20 仙佛に泛濫し、心術を壞ることをする。
- 21 作文は人に勝とうと欲する。
- 22 家童を縱放して、その仲間に満足と與えない。
利爲無志。爲肆欲。爲虛樂。爲外倫求道。爲先文藝。爲
巧令以滋偽。爲暴怒。爲事父兄也不誠切。爲不求師。爲
傳而不習。爲週長抗倨。爲同門猜嫌。爲期約不信。爲師
成心。爲徒事學業、以干祿。爲支離。爲讀書主敬兩途。
爲作文欲好。爲考業用心粗。讀書觀山水爲枯亡。爲泛濫

仙佛、以壞心術。作文爲欲勝人。爲縱放家童、不充其類焉。及其成也、爲小人。(同「敍規」エ)

終わりに、だから、昔の人は、終日乾々として君子となり、道を求めて止まず、今の人は、終身弊々として小となり、道を求めることを知らない。昔の人と今の人と、能力に差があるわけではない。今の人は、道を求める方法を知らないのである。故に、學は辨術を先きにするこがなによりである。そこで、その方法を圖示すれば、思い半ばに過ぎると、結んでゐる。

是故、古之人、有終日乾々爲君子而不息矣。今之人、有終身弊々爲小人而不知者矣。豈其智不若歟。其術使然也。是故、學莫先於辨術矣。學者觀其圖焉、斯過半矣。(同「敍規」オ)

三

「訓規圖」は次のようである。

- ○ 期約以信 → ← ○ 去成心
- ○ 同門久敬 ← ○ 二業合併
- ○ 遇長謙讓 ← ○ 内外混合
- ○ 傳習 ← ○ 讀書調心合一
- ○ 自得師 ← ○ 作字敬
- ○ 事父兄誠切 ← ○ 考業用心精

- ○ 不怨尤遷怒 ← ○ 讀書觀山水不失己
- ○ 言動由中出 ← ○ 博六經開知見
- ○ 篤實 ← ○ 作文發所得
- ○ 求道於人倫間 ← ○ 敎家僕
- ○ 爲實樂 ← ○ 君子
- ○ 體認天理

肆利不志道

- ← ○ 肆欲 → ○ 小人
- ← ○ 虛樂 → ○ 縱家童
- ← ○ 外倫求道 → ○ 作文欲勝人
- ← ○ 先文藝 → ○ 泛濫仙佛懷心術
- ← ○ 巧令滋僞 → ○ 讀書觀山水枯亡
- ← ○ 暴怒 → ○ 考業用心粗
- ← ○ 事父兄不誠切 → ○ 作字欲好
- ← ○ 不求師 → ○ 讀書主敬兩途
- ← ○ 傳而不習 → ○ 支離
- ← ○ 遇長抗倨 → ○ 徒事學業以干祿
- ← ○ 同門猜嫌 → ○ 師成心
- ← ○ 期約不信 → ○ 師成心

この「訓規圖」は、諸生が大科書院において、日々修徳する心掛けを、一目瞭然とするため、圖示したもので、この圖を仔細に觀察すると、中心より右に、「心幾敬義志道」を擧げ、左に「肆利不志道」を置き、右回りは「敬義志道」、左回りが「肆利不志道」になることを表わしている。

さて、右回りの第一項に、「體認天理」を擧げたのは、彼の學説である「隨處體認天理」のことを意味するもので、これを身につけるには、「進修時、煎銷習心。」と註に説明している。「習心」とは「人心」すなわち「欲心」のことで、「欲心」をなくすることが、「煎銷習心」である。

この「體認天理」を大前提として、「爲實樂」から「期約以信」までの十一項目は、生活態度を、「去成心」から「教童僕」までの十項目は、學習態度をいつた項目であると思われる。したがつて、この二十一項を心に銘じて、日々研鑽すれば、「君子」となれるのである。

左回りの「肆利不志道」は、この正反對をいつたもので、「肆欲」を大前提として、「虛樂」から「期約不信」までの十一項目は、生活態度の、「師成心」から「縦家童」までの十項目は、學習態度のしていけないことを擧げている。このしていけないことをすると、結局は「小人」となつてしまふというのである。

なおここで注目すべきは、「肆利不志道」を「心幾敬義志道」より一段下げていることである。人間の嫌惡するものであるからであらう。

この左右回りの項目は、すべて相對している。したがつて、次のように列べることもできる。

	心幾敬義志道		肆利不志道	
←	○體認天理	↕	←	○肆欲
←	○爲實樂	↕	←	○虛樂
←	○求道於人倫間	↕	←	○外倫求道
←	○篤實	↕	←	○先文藝
←	○言動由中出	↕	←	○巧令滋僞
←	○不怨尤遷怒	↕	←	○暴怒
←	○事父兄誠切	↕	←	○事父兄不誠切
←	○自得師	↕	←	○不求師
←	○傳習	↕	←	○傳而不習
←	○遇長謙讓	↕	←	○遇長抗倨
←	○同門久敬	↕	←	○同門猜嫌
←	○期約以信	↕	←	○期約不信
←	○去成心	↕	←	○師成心
←	○二業合併	↕	←	○徒事畢業以干祿



對比にしないで圖式にしたのは、記憶に便にしたためであり、右に「敬義志道」を、左に「肆利不志道」を配列したのは、古來から右を尊んだ、中國の思考に基づいたのであろう。

四

大科書院の中に、大科書堂がある。ここは、甘泉が諸生に講學した場所である。この講學に對し、主に諸生の修學における心得を書いたのが、「大科書堂訓」である。

「大科書堂訓」は、六十一か條から成つてゐる。しかし最後の條は、來院者に對する取次方を書いたものであるから、正確には六十か條と見ることが出来る。この六十か條

は、十干十二支の一回りであるから、恐らくはこれを形取つたものであろう。「大科書院訓」としないで、「大科書堂訓」としたのは、修學の心得を中心にしたからであらう。次に各條を概説する。

第一條、修學の根本。修學は志を立てることが、何より先である。これは室を作るものが、まずその土臺をいうのと同じである。その志は人間の踏むべき正しい道に志すのである。志を立てるのは敬である。匹夫も志を奪うことはできない。奪うことができるようなのは、志とはいえない。徹頭徹尾、だれもこの一字である。

諸生爲學、必先立志。如作室者、先曰其基址。乃可志者志於道也。立之是敬。匹夫不可奪志。若其可奪、豈謂之志。自始至終、皆是此一字。

第二條、修業の目標。それは「隨處體認天理」である。これは湛甘泉の學說で、すなわち大學の「格物」、程明道の解釋する「至理」である。意心身家國天下を、通して一段の修行とし、遠近彼此のないようにする。終日終身、ただこの天理の二字を體認することである。

諸生用功、須隨處體認天理。卽大學所謂格物、程子所謂至其理。將意心身家國天下、通作一段工夫、無有遠近彼此、終日終身、只是體認這天理二字。

第三條、日課表。これによると、毎日、鶏鳴と共に起き、三時から九時まで誦書、九時から一時まで看書、午後一時から三時まで作文、三時から七時まで黙坐思索、七時から十一時まで温書となつてゐる。これからすると、睡眠時間は四時間足らずということである。まことに厳しい日課であるのに驚く。しかし、この中には、幅と休憩時間が含まれていると見るべきである。それも本領を失うようではないけない。ここで注目しなければならぬのは、三時から九時まで、書を朗讀するということである。朗讀は一面には眠氣覺ましたに、他面では内容を味わううえに効果があつた。終わりに、通じて涵養體認の意で、これを繰り返せば、月に異なり、歳に進むといつてゐる。

諸生進德修業、須分定程限日、以爲常。毎日、鶏鳴而起、以寅卯辰三時誦書、以巳午時看書、以未時作文、申酉二時黙坐思索、戌亥二時温書。然此等大抵、皆不可失了本領。通是涵養體認之意、如此持循、當月異而歲不同矣。

第四條、煎銷習心。すなわち「體認天理」する方法をいつたものである。習心は既に説明したように、人心をいふ。人心は欲心である。この心を煮てとかすことを、それは金銀を煎銷するように、何度も何度も繰り返し、すつかりなくなると、大賢の心になる。すると天理を體認できる。

諸生爲學、患心不定。只是煎銷習心、三層五層。如煎銷金銀一番、煎銷愈見一番精明。煎銷盡者、爲大賢之心。習心卽人心。心只是元一個好心。其不好者習耳。習盡則元來本體廣大高明、何嘗有缺。何所沾惹内外合一。

第五條、實樂と起居問答の際の心得。實樂は、濂溪が孔子・顔子の樂む處を尋ねさせたのはそれは自分の疑うところ得るところを質したことである。曾點の樂みはよいが、切實を體認していない。起居問答の際は、誠が中より出ることが大切である。人を疑つてはいけない。巧言令色は、僞心を滋くする。

學者雖去聖賢甚遠、然大意亦理會。如曾點的樂可、不體認切實。濂溪所以每令尋仲尼・顔子處樂、其質所疑所得。其起居俯仰之間、及問答之際、須要誠由中出。不可疑。爲巧言令色、以滋僞心。

第六條、初學の修業。初學の勉強は、茫然としてどこへ力を入れてよいかわからない。だからただ言動の間に、修業を置くべきである。步趨は從容であること、言語は和緩であること。一步々々一言々々、心と相應じ、一々中より出るようにすることが大切である。これを存習することが久くなると、自然に一面の進歩をする。

初學用功、茫然無着力處。只且於言動間存習。步趨要從

容、言語要和緩、歩々言々、要與心相應、一々使由中出。存習之久、自然成片段。

第七條 諸生相處する心得。一言一動、皆禮義に本づき、時に俗態をいつても、少しも利口ぶらないことである。この氣持ちを心につけていと、自然に長進する。この戒めを犯すものは、皆で共々正すことである。

諸生相處、一言一動、皆本禮義、時言俗態、一毫不留於聰明。以此夾持、自然長進。其有犯此戒者、諸生相與正之。

第八條 小厮を隨帶して山へ來たときの注意。薪水の仕事をした後は、目をかけ可愛いことが大切である。飲食寢臥衣服も、また照ししらべるのがよい。切に暴怒を戒め、これを修行することである。程明道先生は、怒る時には、急にその怒を忘れて、理の是非を觀ることであるといつてゐるが、すなわちこれが學問である。孔子は、天を怨みず、人を尤めなかつたし、顔回は怒を遷さず、過を二たびしなかつた。聖賢の學は、全く性情の理會にある。

諸生隨帶小厮來山、執薪水之後、須要恩顧。飲食寢臥衣服、亦須照點。切戒暴怒、卽以此做工夫。明道先生云、當其怒時、遷忘其怒、而觀理之是非。卽此是學。孔子不怨天。不尤人。顔子不遷怒。不貳過。聖賢之學、全在性

情之理會。

第九條 歸省して孝養の誠をすること。山に居ることが長くなつたら、歸省して、孝養の誠をすることが大切である。すなわちこれが學問である。父母兄長に仕える際は、また自分から誠切と平常進退がどうかであるかを試し、もし父兄が喜んでゐるのを見たら、これは自分の學問が進んだ證據である。そうではないと、まだ學んだ實力がわからない。

諸生居山日久、須要歸省、以致孝養之誠。卽此是學。事父母兄長之際、亦自驗其誠切、與平時進退何如、若見父兄愉快、便是已學進處。不然、未見實力。

第十條 歸省して、宗族鄉黨に遇つたときの心得。この場合は禮をもつてし、必ず敬老慈幼の誠をすることである。すなわち一家一郷が、和氣浹洽すれば、そこで學問をした價值がわかる。

諸生以時歸省、宗族鄉黨相遇以禮、必致其敬老慈幼之誠。便一家一郷、和氣浹洽、乃見學問。

第十一條 自ら師を求めることが大切であること。人間は、命を求める病氣には、必ず醫師を求める。命が惜いからである。且つ、今の百工技藝は、とりわけ務めて師に教を請う。句讀の師、學業の師に至つても、またそうであ

る。ところが、心を治め以て性命を立てるに至つては、すなわちあえて師を求めない。そればかりか、師に教を請うことを恥じて、私は知つている。私は知つているという。むしろ身を没しても悟らない。さて哀しいことは、心が死んでいるより大きいものはない。そして身が死ぬのがその次である。病氣では醫師に罹るのを恥じない。心病には自らあえて師を求めて教を請うことをしない。どうして心を愛すること、わが身を愛するのに及ばないのであろうか。全く思わないのも甚しい。本當に思うならば、孔子のいう、民の仁におけるや、水火よりも甚しの言の通りで、何もいうことがない。

學者須要求自得師。有如求命人之病痛、必求醫師。所以求命也。且今之百工技藝、尤務拜師。至於句讀之師、舉業之師、亦然。及至治心以立性命、乃不肯求師。耻拜其師、乃曰我知之矣、我知之矣。寧没身不悟。夫哀莫大於心死。而身死次之。在彼則不耻拜師。在此則自是不肯求師拜師。豈愛心不若愛身哉。弗思甚矣。誠思、孔子民之於仁也、甚於水火之言、何謂。

第十二條 來山從學の心構え。諸生は父母兄弟妻子を離れて、來山從學しているのであるから、實際に十分な修行を行い、離達の罪を贖うのが大切である。悠々と日を過こ

すようなものは、これまた罪の甚しいものである。

諸生離父母兄弟妻子、來山從學、須實用十分工夫、乃能贖其離達之罪。若又悠々過日、是又罪之甚者也。

第十三條 諸生の缺點。傳えて習わないもの、愆を顯すもの、師に仕え、教を受け、歸つて諸生の勵ましとすることを恥じとするものがある。

諸生中、有傳而不習者。有顯愆者。有耻事其師、聽其辭、歸以爲諸生之勸。

第十四條 常師なし。ところかまわず、徳行道藝で先覺の人に、師法とするようなところがあつたら、必ず恭しく座に升り書を講じることをお願いし、進益を求め、まだ聞かないことを聞くことである。聖人孔子も常師がなかつた。遠方及近處、有徳行道藝先覺之人、可爲師法者、必恭請升座講書、以求進益、聞所未聞。孔子之聖、亦何常師。第十五條 長者に遇つて抗禮しないこと。同輩も恭敬の心を養うこと。

諸生每遇與先生同儕之人、必推先生之意、以前輩事之、不可倨然抗禮。或其人與之、平日分定、或年相若、亦必以三讓之禮。若不得已、則側行邊坐、以致退而不居之意。此乃自養恭敬之心、亦非關彼事耳。

以下略。

五

さて、「訓規圖」と「大科書堂訓」の關係は、どうなつて
 いるであろうか。次は、「訓規圖」に、「大科書堂訓」の各
 條が、どう該當しているかの表である。

心幾敬義志道

←○體認天理	1	←○作字敬	
←○爲實樂	2 3 4	←○考業用心精	29 41
←○求道於人倫間	5	←○讀書觀山水失己	43
←○篤實	7	←○博六經門知見	45
←○言動由中出	8	←○作文發所得	46
←○不怨尤遷怒	9 10	←○教童僕	8
←○事父兄誠切	11 12	←○君子	
←○自得師	13	肆利不志道	
←○傳習	15	←○肆欲	4
←○遇長謙讓	16 17 19 20 21 22 23 24 25	←○虛樂	⑤
←○同門久敬	26	←○外倫求道	⑦
←○期約以信	27	←○先文藝	
←○去成心	32 33 34 35	←○巧令混偽	5
←○二業合併	36	←○暴怒	8
←○内外混合	37 38	←○事父兄不誠切	⑨ ⑩
←○讀書調心合一		←○不求師	11
		←○傳而不習	13
		←○遇長抗倨	⑮
		←○同門猜嫌	
		←○期約不信	26
			⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕

- ← ○ 師成心 ②⑦
- ← ○ 徒事舉業以干祿 ③② ③③ ③④ ③⑤
- ← ○ 支離 36
- ← ○ 讀書主敬兩途 37 ③⑧
- ← ○ 作字欲好
- ← ○ 考業用心粗 29 41
- ← ○ 讀書觀山水枯亡 43
- ← ○ 泛濫仙佛壞心術 54
- ← ○ 作文欲勝人 46
- ← ○ 縱家童 ⑧
- ← ○ 小人

註 ○で数字を圍んでるのは、内容は反對でも、言葉として表現していないもの。

これに依ると、二つの疑問點が出る。一つは、「訓規圖」に該當する條文が、「大科書堂訓」にないこと、他は、「訓規圖」に重要な徳目と思われるものが、「大科書堂訓」にあるということである。

前者は、「心幾敬義志道」にあつては、「篤實」「作字敬」「君子」、「肆利不志道」にあつては、その反對の「先文藝」「作字欲好」「小人」などである。思うに、これらの項目は、説明を俟つまでもなかつたからであらう。

ところが、後者はどうであらうか。第三條「日課表」、第七條「禮義」、第十二章「來山從學の心構え」、第十八條・三十一條「輪讀」、第二十八條「讀書法」、第三十條「聽講の心構え」、第三十九・四十條「習字の心構え」、第四十二條「肄業の仕方」、及び第四十七條以下第六十一條まで、凡て二十五條ある。

このことは、どう判斷すべきであらうか。「訓規圖」を先きに作り、その後「大科書堂訓」ができたとするのが妥當である。したがつて、「大科書堂訓」には、「訓規圖」に缺けているものを補つた、いわば細目的性格があると考えられる。

結 び

以上「大科訓規」について、その成立、内容、關係等を述べた。概括するに、今日の條文作成から見ると、かなり杜撰な面も窺われるが、當時としては、精魂を傾けた貴重な訓規であるといえよう。殊に「訓規圖」を作つて、諸生の修學の資としたことは、卓見である。

なお「訓規圖」と「大科書堂訓」を見ると、「訓規圖」の「心幾敬義志道」を「大科書堂訓」の第一條「立志」に置き、「體認天理」を第二條に、第四條では、第二條「體認天理」を達成するための條件を擧げたことは、兩者の關係

を明瞭にするとともに、条文として基本線が確立されている。

ともあれ、この「大科訓規」が、門下生に大きな教訓を與えたことは、否めない。王陽明に與えた影響も大きい。今回は、紙面の都合上、割愛する。

(昭和學院短期大學教授)